



幼 児 童 話

# お母さんのお使ひ

高 橋 良 和

お年越かくるミセツになるミ言ふのに弘ちやんは泣き虫でした。お母さんに空氣銃をおねだりしては駄々をこね、機關銃を買ってもらはないミ、誰かのする様にお顔

をブーミふくらす様な弱いお子さんでした。

「弘ちやん、こんご櫻が櫻く頃になるミ學校へ行くのですよ。そんな弱い事でございます」

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理をしています。

てお母さんからいつも言はれて居てもついちぎ道端でころんと言つてはお家中ひびきそうな大聲を出して泣くのです。

「本當にこまつた子だこゝ。學校に行くと言ふのに、こんな事で一人で行けるかしら」こいつもお母さんは心配してゐました。

こある日の事です、お母さんがね、

「弘ちやん、今日はね、お祖母さんのなくなつてから一年になるですよ、あの、弘ちやんをこても可愛がつて下さつたお祖母さんだから、佛さまに供へるおそなへものを買ひに行つてくれない」こおつしやいました。「駄目だよ。僕がおつかひに行く」横町の犬が吠えるんだもの」

「おや／＼、うまい事言つてお使がいやなものだから、ぢやお母さんが御門でみてあけるから、八百屋さんへ一寸走つて頂戴」

「いや／＼、駄目だ／＼」

「ほれごらん、いくのがいやなものだから、あんな事を言つて、もう今年から學校ですよ、それに今日はお祖母さんの御命日ですから、きつこお祖母さんも喜ばれますよ」

「でも僕お使ひなんか恥かしいんだよ」

「大きいくせに、一度行くきつこすきになりますから行つてごらん、學校へ行くのに、一人でお使ひに行かないなんか言つてゐる人に笑はれますよ」

「でも僕……」こ言ふてゐましたけれど、お母さんがあまり言はれるもんだから弘ちやんも、こ／＼し／＼お使に行く事になりました。行先は角の八百屋さんです「あのね、お供物にするのですからリンゴを下さいつて云ふのよ」言へますか、

「え、お供物にするのですからリンゴを下さいでしやう」

「そうそう、お母さんが御門でみてあけるから」

弘ちやんはお買物籠をわたされるこし／＼お家を出ました、初めてのお使ひだものですから行く道で八百屋さんで言ふ事をわすれない様に

「お供物にするのですからリンゴを下さい」

こ繰返してゐました。その中に八百屋の店までくるこ、

「おぢさん、お供物にするのですからリンゴ下さい」こ言ふこ、

奥からニコ／＼したおぢさんが出て来て、

「おや、横山さんの坊ちやんですか、大きくなつて、リンゴですか、お供物で誰の」

「僕ここのお祖母ちやんだよ」

「そうですか、もう一年になりますかなあ、坊ちやんを良く可愛がりなすつたのになあ、早いもんですなあ」  
と言ひながらリンゴを籠の中に入れてゐました。

「坊ちやん、何歳です」

「七つ」ミ弘ちやん兩手を出しますミ、

「早生れですね、今年から學校ですか、お利口さんですね、いゝ子になるんですよ、お駄賃に今箱をあけたばかりのお密柑をまけておきますよ、ほーら三つ」

と言ひながら八百屋さんのおぢさんは弘ちやんの頭をなでゝくれました。

リンゴを買ふミ走る様にお家にかへつてくるミ、お母さんが御門の前でまつて居て下さいました。

「お利口だったね」

「お母さん、あの八百屋さんのおぢさんね、お駄賃、たつてお密柑を三つもくれたよ、そして僕の頭をねなでゝいゝ子になるんですよ、言つたよ」

「そうですか、お母さんのお使ひに行く子はみんないゝ子だから、おぢさんも褒めて下さつたのでしやう、弘ちやんも今度からもつミゝお使ひに行くんですよ」  
「うん、僕もうはづかしくなくなつたよ」

「そう、ぢやお母さんもお駄賃をあけようか」

「お母さんは袋戸棚から飴玉を出して下さいました。」

「ありがたう、お母さん、あの僕もらつたお密柑はおぢさんが、今箱をあけた所だつて言つてゐたからお祖母さんのお供物にして頂戴」

「そう、ぢやお祖母さんのお供物にいたゞいさませう」  
ミお母さんは早速そのお密柑をお佛壇にそなへました。  
それから暫く遊びに行つてかへつて來た弘ちやんはお母さんに

「弘ちやん、一度お祖母さんのお供物をみて來てごらん  
きつミお祖母さんもよろこんで居られますよ」

そう言はれたので、そゝミお佛壇の前まできました弘ちやん、お祖母さんのお寫眞の前で手を合はせました。ふミお供物をみるミさつきのリンゴが供へてあります。その横にお密柑が三つそなへてあります。

「弘ちやんのお密柑もそなへましたよ、いつもお使に行きいゝ子になりませうね、わかつた、なくなつたお祖母さんにも喜んでいたゞく様に」

ミお母さんはうしろから弘ちやんの頭をなでゝ下さいました。

「學校へ行くのミおごミばかり言はれて居た弘ちやん  
それから小言一つ云はれないいゝ子になりました。」